燃えるごみ

焼却して衛生的に減量

胆江地区衛生センターに運ばれた燃えるごみは、ごみ焼却施設のごみピットにいったん貯留。燃えやすいようクレーンで均一に混ぜられた後、階段式ストーカ炉方式の焼却炉で燃やされます。

ごみの量は焼却前の約10分の1になり、燃やすことでばい菌や害虫、臭いの発生を防ぐこともできます。

また、排気ガスの中に混じっている灰も、集塵機（バグフィルター）が除去。最終処分場で重金属が溶け出さないように安定剤で固められた上で、ごみの焼却灰と一緒に最終処分場に運ばれます。

アルミニウムや針金は混ぜないで

ごみ焼却施設には、1日に120トンほどのごみを燃やすことができる焼却炉が2つあります。焼却施設内の部品は、火や熱などで消耗していくため定期的な交換が必要です。燃やすごみの量が多ければ、頻繁に交換しなければいけません。

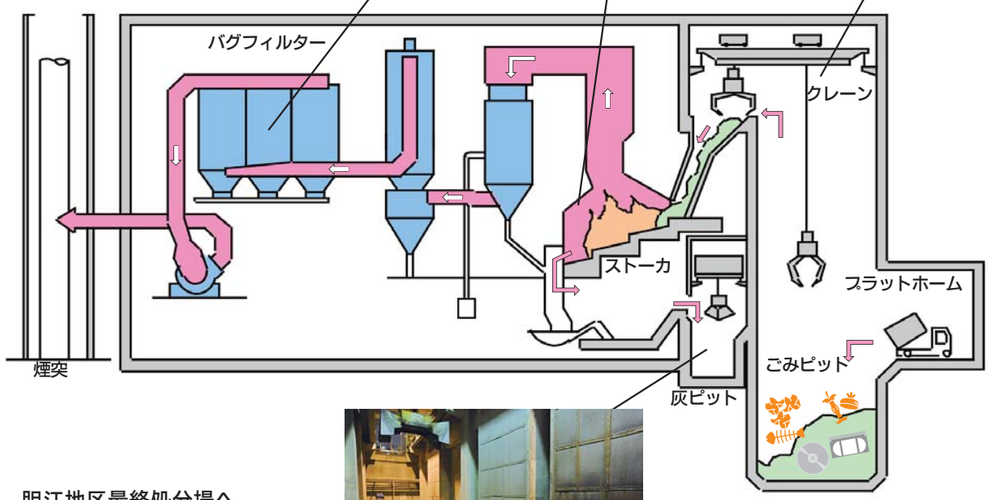
アルミ製品や針金がごみの中に混ざっていると、燃えずに塊となって階段式ストーカの段に詰まり、さらに部品の交換や修理が必要になります。

燃えるごみの焼却と施設の維持には年間約6億円の費用が掛かっています。

ごみを減量することはもちろん、きちんと分別することが、施設を長く有効に使い、費用を減らすことにつながるのです。

焼却炉から見付かった針金（左）とアルミ

燃えるごみの焼却 6億円のうち市の負担 年間約3.1億円※



胆江地区最終処分場へ

燃えないごみ

粉々に砕いて処理

燃えないごみは、胆江地区衛生センター内の粗大ごみ処理施設に運ばれ、巨大なミキサーのような破砕機で粉々に砕かれます。その後、磁選機の磁石で鉄くずを取り、燃えない物と燃えるものを振るいに掛けて分別。鉄くずはリサイクルに、木くずなど燃えるものは焼却炉に回し、ガラスなど燃えないものだけが最終処分場に運ばれます。

きちんと分別を

粗大ごみ処理施設では、破砕機にごみを入れる前にクレーンや人の手でごみ袋を破り、処理できないごみが入っていないかを確認しています。ケーブルやコード類、スプリングなどは破砕機に絡まってしまい、工具など固い金属は破砕機を破損させる恐れがあるため取り除きます。

特にも危険なのがスプレーやガスボンベなど。中身が残ったままだと、爆発や火災事故の原因に。ことし5月にも火災が発生しています。

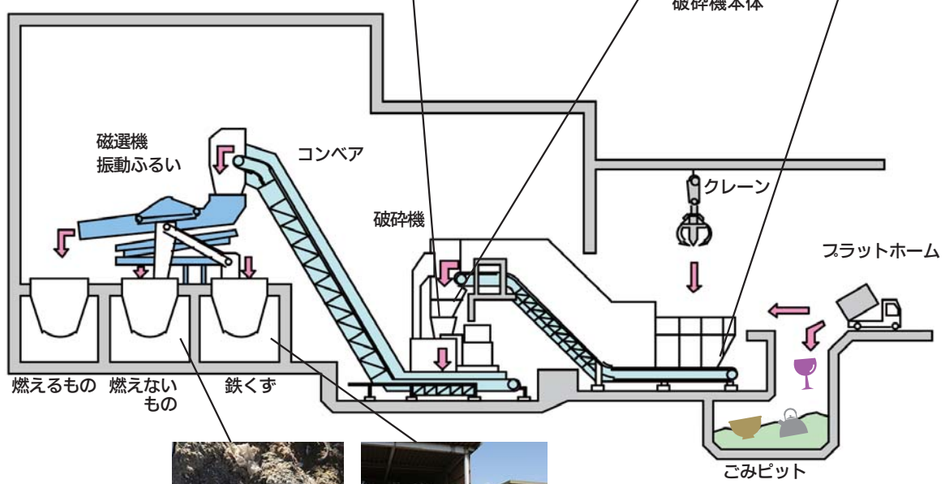
現在の粗大ごみ処理施設は、昭和55年3月に完成したもので、ごみ処理と施設の維持管理には年間約8000万円の費用が掛かっています。少しでも長く施設が使えるようにするためにも、きちんと分別してごみを出しましょう。

使い切らず捨てられたスプレー類

鉄アレイも砕くことはできません

燃えないごみの破砕 8千万円のうち市の負担 年間約4.3千万円※

破砕機の刃
破砕機本体
受入コンベア



胆江地区最終処分場へ

リサイクルへ

※本市が奥州金ケ崎行政事務組合に支払っている分担金を、ごみ処理の段階に応じて按分した金額